

『紅樓夢』は、清の盛期の大貴族一家の生活、主人公の少年、賈寶玉の周囲の女性等の思春期の淡き戀の達引きを、如實に寫したるリアリズム小説なりと言ひ得べきも、發端に記されたる小説成立の縁起は、眞に奇怪にして、荒唐無稽なり。そは、中國に於ける長編章回小説なるものの、市井の講談に發したる淵源を示すなるべし。

中國の長編小説の、奇怪なる物語を發端とせるは、『水滸傳』の例あり。宋の世、朝廷の高官、皇帝の命を奉じ、今の江西省なる龍虎山に、道教教祖を訪ぬれど、教祖より翻弄せられて、不機嫌となり、伏魔殿の封印を剥がしたるにより、百人の妖魔の黒き煙となりて世に飛散せるが、『水滸傳』中梁山泊百人の英雄の、世に現るる因縁譚なり。我が邦馬琴の著せし『里見八犬傳』發端の、八犬士の世に出づる因縁たる、伏姫と八房の奇怪なる物語は、『水滸傳』の發端に想を得たるものとせらる。

『紅樓夢』は一名『石頭記』と言ふ。「石に書かれし物語」の意なり。小説發端の縁起譚に曰く。太古天破れ、帝妹の女媧氏、石を集め、煉りて天を補ひたる時、一つ剩したる石塊、女媧氏に煉られて靈性を備へし故、伸縮自在、人間界に下りて、見聞させる一部始終を石頭に綴りしが、『紅樓夢』の物語なりと。

荒唐無稽なる縁起譚、今一つあり。西方靈界のほとりの絳珠草なる靈草、水涸れて枯れなんとする時、神瑛使者なる神人、日を繼ぎて甘露を注ぎたるにより蘇生せるのみか、仙女の姿に變り、久遠の生命を得たり。神瑛使者の人間界に轉生するに従ひて、側近くに人間の生を承け、自ら流す涙もて、神瑛使者の甘露の恩に酬いんとす。

神瑛使者の轉生せるは賈寶玉にして、四季涙の絶ゆるなき林黛玉、絳珠草・絳珠仙女が生れ換りなり。されば寶玉、黛玉の地方より上京し、初めて賈家に來りし時、「この日舊友の遠く別れたるに重ねて逢ふ(…舊相識、今日只遠別重逢)」が如く、感じたるなり。

賈寶玉の母胎より生れ落つる時、彼の女媧氏が靈石を手握り締めたりとぞ。寶玉長じて、石は首に架くる胸飾りに細工せらる。物言はぬ靈石、なべての物語の記録者たるこそ神妙なれ。

『紅樓夢』の初めに、著者曹雪芹が記したる題詩に曰く。

滿紙荒唐言 紙に滿つるは荒唐の言なれど

一把辛酸淚 一把みの辛酸の淚あり

都言作者癡 みな 都言はむ作者は癡なりと

誰解其中味 誰か其が中の味を解せむ

又『紅樓夢』劈頭に曹雪芹の述べたる感慨、以下の如し。「今風塵(浮世)に碌碌たり、一事として成す無きに、忽ち念ひ當日有る所の女子に及び至り、一一細かに考較し去れば、其の行止(行動)見識、皆我が上に出づるを覺ゆ。何すれぞ我堂堂たる鬚眉(男子)にして、誠に彼の裙釵(女子)に若かざる哉。實に愧づるに餘り有り、悔ゆるも又益無きこと大にし

て、如何ともすべき無きの日也。ここに當り、則ち自から已往の天恩祖徳に頼る所をもつて、錦衣紈袴の時、飫甘饜肥の日、父母教育の恩に背き、師友規談（教へと訓育）の徳に負き、以て今日一技として成らず、半生潦倒（ぼんやりと過ごした）の罪に至れば、一集を編述し、以て天下の人に告げんと欲す。（今風塵碌碌、一事無成、忽念及至當日所有之女子、一一細考較去、覺其行止見識、皆出于我之上。何我堂堂鬚眉、誠不若彼裙釵哉。實愧則有餘、悔又無益之大無可如何之日也。當此、則自欲將已往所頼天恩祖徳、錦衣紈袴之時、飫甘饜肥之日、背父母教育之恩、負師友規談之徳、以至今日一技不成、半生潦倒之罪、編述一集、以告天下人。）」